

## 絵本の発達心理学的分析（1）

——『かいじゅうたちのいるところ』を素材として——

山口 雅 史\*

Analysis of picture books from the viewpoint of developmental psychology (1)  
—— An analysis of “Where the wild things are” ——

Masafumi YAMAGUCHI

### 問題と目的

子供の発達には、発現の時期やタイミングに多少のずれはあるものの、各発達段階ごとによく似た過程を経て進んでいく。その主な理由は身体的な準備性によるもので、子供達は発達に伴って新たな機能を備えた身体の効率的な使い方を学び、その身体を使った生活パターンを身につけていく。

同時に、社会的な動物でもある人間は、他者との交流のしかたも身につけなければならない。まずは、親や家族など身近な成人を相手に1対1（あるいは1対少数）の人間関係から始め、それに準ずる成人達、そして、自分と同世代の仲間達との交流方法を身につけていく。それは誰かに教わるといったものではなく、自ら模索し、他者をまね、何度も試行錯誤をくり返しなから自分なりのコミュニケーション・スキルを修得していく。

また、認知能力の発達に伴って、周囲の環境や自分自身について理解しようという試みも始まる。周囲の環境に関しては、意味や概念の発達、知識の拡大、対象への操作能力の発達として、自分自身については、自己概念の獲得やアイデンティティの確立として発達は進んでいく。

子供達は、外発的な報酬などなくても、これらの身体的、社会的、認知的能力を発達させていく。その過程は必ずしも順調に進むとは限らず、何度も失敗をくり返し、その度にさまざまに試行しつつ、やがてそれを乗り越えて新しい発達の段階へと進んでいくのである。

その過程ではさまざまな戸惑いや葛藤が生じるだろう。うまくできない自分（その評価は成人からの評価をそのまま取り込むことから始まるが、やがて自律的な評価が可能となる）を意識するとき、そこには悔しさや恥ずかしさ、劣等意識や無力感が生まれる。しかし、反対にうまくやり遂げたときには、嬉しさや誇らしさ、自己肯定感や自尊感情が芽生えることになる。

とは言え、“うまくいっていない状態”に耐えることは難しい。その程度は人により異なるのだろうが、うまくいっていない状態に耐えながらどうすればその課題をクリアできるのかを模索する過程は、時に苦しく、ストレスフルだ。そんなとき、その気持ちをなだめ、落ちつかせ、頑張ってみようという意欲をもたらすのは、「この状態はいつまでも続かない、きつとうまくいくようになる」という自分への、あるいは将来への希望だ。自己効力感や自尊感情、つまり日常的な言葉で言う“自信”を持つことが、次へ進む原動力となるのだ。

---

\*心理学科 教授

そのような将来の自己への希望、自己を信頼する感覚を生み出す源になっているのは親、祖父母、保育者など、幼児を取りまく身近な大人達だ。彼らがこの世界をどう捉えているのか、自分（子供自身）をどう評価しているのかを把握し、取り入れ、それらを参照しつつ自己の価値観を作りあげていくことで、自己の未来に希望があるのか、あるいは絶望しかないのかを理解する。

そのような社会的参照を行う際、有効な資源の1つとなるのが物語や絵本である。自己について親から直接的にもたらされる言説（「かわいい」とか「バカだ」とか）も重要な参照資源だが、物語の登場人物に心をよせ、その人物（もしかしたら人ではなく動物の姿を取っているかもしれないが）に同一視をし、この世界の成り立ちやそこでの生き方、困難に出会ったときの立ち向かい方などを学んでいく。これはもちろん幼児期特有の現象ではなく、児童期、青年期、さらには成人期にも普遍的に見られるものである。

読書という体験を心理的な問題解決のための援助手段として利用しようとする試みは、読書療法（Biblio therapy）として知られている。例えば、Pardeck & Pardeck（1984）は、対人関係の問題を抱えている読み手は、読書療法を通じて、問題を抱えているのは自分だけではないということや、そういった問題には何かしらの解決法があるのだということを理解することができる」と指摘している。

読書療法は、同一視と投影（identification and projection）、除反応とカタルシス（abreaction and catharsis）、洞察と統合（insight and integration）の過程を経ることが知られている（Pardeck & Pardeck, 1984）。最初のステップである“同一視と投影”では、読み手は自分とよく似た問題を体験している登場人物に同一視することで、登場人物の思いや人間関係など物語に含まれるさまざまな意味を読み解き、自分の前に立ちはだかる問題に対してそれらを当てはめてみる。それにより、次の“除反応とカタルシス”のステップへと進んだ読み手は、何かしらの感情的な解放を体験することとなる。そして、自分の抱える問題への新たな洞察を得、その解決の糸口を見出す“洞察と統合”という最終ステップに至るとされている。

ファシリテーターが援助する読書療法ほど明瞭ではないにしろ、この3つのステップは日常の読書体験の中でも我々が体験する過程である。登場人物に同一視したり、物語の中に自己の課題を映し出したり、読後にさまざまな感動を味わいつつ、漠然とではあっても自己の抱える問題への解決法を見出したり、あるいは少なくとも解決の可能性についての洞察を得ることは、読書を通じて多くの人が体験していることであろう。

基本的信頼（乳児期）、自律性（幼児前期）、自発性（幼児後期）、勤勉性（児童期）といった発達課題（いずれも、Erikson, 1963/2003）を抱える乳幼児や児童もその例外ではなく、周囲の大人によって語られるお話や絵本、物語本、また近年ではマンガ本やアニメ等のテレビ番組が、課題を克服していく過程でのサポート役となっているだろうことが想像される。

そこで、本論では、家庭だけではなく幼稚園や保育所、こども園などでも保育教材として頻繁に使用される絵本を取りあげ、その内容を分析することで、子供達にとってどのような資源として機能しているのかを考察する。

## 方 法

素材としては、初版から半世紀以上にわたって読み継がれている Sendak（1963/2005）の『かいじゅうたちのいるところ（Where the wild things are）』を取りあげる。我が国においても40年以上にわたって再版が続けられ、今では合計125万部が発行されている（『ミリオンぶっ

く2019年版）文字通りのミリオンセラーである。

この絵本はこれまでもいくつかの論文で取りあげられている。移行対象という視点から『くまのプーさん』等との比較検討を行った井原（1985）やユング心理学の理論を使いながら内容分析を行った三沢（1987）、絵本に描かれた冒険ものの1つとして分析した西川（2016）等である。本論では、これらの論文とは異なった視点から乳幼児期の発達課題と関連させつつ分析を試みる。

『かいじゅうたちのいるところ』は、見開き2ページで1場面を構成している場面が18場面（36ページ）、1ページで1場面を構成している場面が1場面（1ページ）で、全部で37ページの構成となっている。そこで、各場面に1から19までの番号を振り、それをもとに物語の構造を分析することとした。

## 結果と考察

### 1. はじまり

#### 《場面1；1-2ページ》《場面2；3-4ページ》《場面3；5-6ページ》

物語は、主人公のマックスがオオカミの着ぐるみを着ていたずらをしている場面から始まる。頭と尻尾のついた動物の着ぐるみを着たその姿は、自らを理性的に統制できず感情や衝動のままに荒々しく行動してしまう、あたかも動物のような彼の幼い心理状態を象徴しているかのようだ。

年齢は明示されていないため描かれた姿から推測すると、マックスは3、4歳、幼児前期から後期にかけての発達段階であるように思われる。この時期は身辺自立を背景に自律性を確立し、母親や父親を主な対象として形成してきた愛着が安定しつつあることも手伝って、家庭を離れ同世代の仲間達と出会い、自発性を獲得することを目指して発達していく時期である。けれど、彼はまだ乳児期から幼児前期にかけて特徴的に見られる情緒的、衝動的な幼い行動パターンから抜け出せないでいるようだ。

発達は階段を上がるように1つ上の段階に急激にランクアップするようなものでもないし、非可逆的なものでもない。幼い状態と発達の進んだ状態とを行きつ戻りつしながらゆるやかに進んでいく。ここに提示されたいたずらをして大暴れするマックスの姿には、乳児期から幼児期にかけての子供達が抱える葛藤状態がうまく表されている。

Erikson（1963/2003）は、幼児前期に乗り越えるべき発達の危機として自律性の課題をあげている。すなわち、身体的な発達と自我の芽ばえを背景に、心身の諸機能を成人からの援助なしに自律的に統制できるようになることがこの時期の発達課題とされている。また、この時期は自分の身体や情動を自らの意志で統制することが可能となり、排泄のしつけに代表されるような自律を求める親からのしつけが開始される時期でもある。幼児前期に自律性を身につけることで「自分の身の回りのことは一通り自分でできる」という自信が付き、これをもとに幼児後期の発達課題である自発性の獲得に向けて進んでいくことになるのだ。

マックスも、今まさに親からのしつけが行われている真っ最中であると思われる。けれど、彼はまだ自分の衝動をうまく統制できないでいるようだ。自己を律することができず欲求のおもむくままに大暴れするマックスは、母親から「このかいじゅう！（この怪獣！）」と言われて叱られる。理性で自己を統制することなく欲望のままに行動するマックスの幼さを的確にとらえた表現だが、母親のこの言葉からも自律、すなわち自我によって自己を統制することに向けてのマックスのしつけが今まさに行われつつあることがうかがえる。

この母親からの叱責に対して、マックスも負けずに「おまえをたべちゃうぞ！（お前を食べちゃうぞ！）」と反発する。このマックスの発した威嚇の言葉は、「食べる」という原初的な欲望に忠実な乳児期の心性から発せられた言葉であると同時に、母親の言葉に反射的に反発した言葉でもあり、まさに第一反抗期真っ只中の幼児前期の姿でもある。

このようにして、自律性を獲得していく過程で生じる葛藤状態がこの絵本の主題であることが、物語の始まりの3つの場面を通して語られている。マックスと同じように幼児期を過ごしている多くの読者（正確には“読み聞かせをしてもらっている者”ではあるが）は、自らの姿をマックスに重ね、同一視することになるのではないだろうか。

## 2. 異界への通路が開く

### 《場面4；7-8 ページ》《場面5；9-10 ページ》《場面6；11-12 ページ》

衝動を適切に統制することを求めた親からの要求に反発（反抗）したマックスは、罰として夕ご飯抜きで寝室に閉じ込められる。寝室で一人きりにされたマックスはなかなか気持ちの整理がつかないのか、現実を受け入れるのを拒否するかのように目を閉じて空想を始める。すると、「しんしつに、によきり によきりと きがはえだして（寝室にによきりによきりと木が生えだして）」、それが次々に増えていって、やがて天井や壁が消え、マックスにとって現実の世界であった寝室はみるみるうちに深い森や野原の異界へと変わっていく。

これは、ごっこ遊びと呼ばれる心的イメージを使った遊びをうまく描写している場面である。ごっこ遊びは象徴機能の発達に裏付けられた遊びであるが、これほどまでに具体的なイメージを想起し、それを持続、展開できているということは、やはりマックスが幼児後期に入りつつあるからであろう。この絵本の主な読者層である幼児期の子供達にとっても、想像の世界にすんなりと入っていくマックスの姿はおそらくとてもなじみ深いものであり、抵抗なく同一視できる場面であると考えられる。

ごっこ遊びに代表される象徴を使った遊びは、さまざまな見立てやふりを組み合わせて展開していく。自らの心内に思い浮かべた心的表象を現実世界にある具体的な物に対して割り振る見立て遊びや、現実世界では幼児に過ぎない自分自身の姿に心的表象として思い浮かべた架空の人物のイメージを割り振り、あたかもその人物であるかのようなふりをするふり遊び。いずれの遊びも象徴機能を効果的に使えなければ楽しめない遊びである。

寝室を深い森に変えていく過程で目をつぶっているマックスの姿が描かれているが、これは日常生活で心的表象を使う活動、例えば、何かの計画を立てたり、簡単な暗算を行ったりするときに我々が取る馴染みの行動である。マックスは、今まさにその幼い心に木や森や荒野のイメージを思い浮かべ、部屋を森や野原へと見立てていこうとしているのだ。この姿は、衝動のままにやりたい放題の大暴れをしてしまう幼い態度を示すことがときどきあったとしても、心的表象を自在に使いこなすという幼児後期にふさわしい発達がマックスの中では順調に進んでいることをうかがわせる場面である。

とは言え、マックスが心的表象を使って展開しているのは月夜のジャングルである。そこは危険な猛獣や怪獣が跋扈する野生に支配された世界であり、その住人達は動物的な欲求のおもむくまま勝手気ままに活動している世界である。それはまるで、生理的な欲求に身を任せ、自己の心身を統制することを放棄して己の欲望に忠実に生きていた乳児期の心性を反映した世界のようなのである。

しかも、そんな怪獣達の世界を、マックスは恐怖に満ちた世界として想像するのではなく、

ワクワクとした期待にあふれた世界、思わず踏み込んでいきたくくなるようなあこがれの世界として思い描いている。このことは、しつけによって自己の心身を統制するという幼児期初期の課題の達成を求められているマックスが、実は欲望のままに自由でいられたより幼い段階である乳児期の生き方をいまだ心地よく感じているであろうことを表している。

こうして、親に叱られ、罰として閉じ込められた寝室は、親からのしつけに強く反抗するマックスによって欲求不満を解消するごっこ遊び空間と化していくのだ。

### 3. 現実世界から異界へ

#### 《場面7；13-14 ページ》《場面8；15-16 ページ》

マックスの空想はさらに進んでいく。ジャングルと化した部屋に今度は「なみが ざぶりざぶりと うちよせて（波がざぶりざぶり打ち寄せて）」、船が運ばれてくる。マックスは運ばれてきた船に乗って夜も昼も航海する。その1年と1日という非現実的に長い時間経過が、次のようなリズムカルな言葉で語られる。

「いっしゅうかんすぎ、にしゅうかんすぎ、ひとつきふたつきひがたって、いちねんといちにちこうかいすると、かいじゅうたちのいるところ（1週間過ぎ、2週間過ぎ、ひと月ふた月日がたって、1年と1日航海すると、怪獣達のいるところ）」

これは、よく知られた「むかしむかしあるところに」や「Once upon a time」のように民話や昔話で使われる物語世界への移行を促す常套句に相当するもので、いわば“合い言葉”や“呪文”のようなものであると考えられる。物語の終盤でも、これとまったく同じ言い回しが異界から現実世界へと戻る際にも使われており、このリズムカルで形式化された言葉が現実世界と異界との間を行き来する際の約束事として使われていることがわかる。

この“合い言葉”によって、「さあ、これからこの世界を離れてお話の世界に入っていきよ」と、物語が現実世界から空想世界へと移行することが読者に提示され、お話を聞く子供達もマックスと共に怪獣達の住む異界へと入っていくことになるのだ。

### 4. 怪獣達の王様になる

#### 《場面9；17-18 ページ》《場面10；19-20 ページ》《場面11；21-22 ページ》

マックスが異界へ到着すると、そこには4頭の怪獣達がいてマックスを威嚇する。《場面3》で、幼い衝動に支配されて大暴れするマックスの姿を母親は「このかいじゅう！（この怪獣！）」と言って叱っている。それを踏まえて考えると、マックスの心が創造した世界である異界に登場したこれらの“怪獣”とは、衝動のおもむくまま自由気ままに活動していた幼い頃、すなわち乳児期の自らの姿を投影した象徴的な存在であると考えられる。この「かいじゅう」と訳されている原語は“the wild things”であり、まさに荒々しい野生の存在そのものを意味している。

それは、怪獣達がマックスへ示した威嚇のしかたからも読みとれる。「すごいこえて うおーっと ほえて（すごい声で『うおーっ』と吠えて）」「すごいはをがちがちならして（すごい歯をがちがち鳴らして）」「すごいめだまをぎよろぎよろさせて（すごい目玉をぎよろぎよろさせて）」「すごいつめをむきだした（すごい爪をむき出した）」などと描写されているが、これらの行動は自己を統制できていない幼い子供が親や周囲の大人に対して反抗する際にしばしば行う行動である。幼児期も後半に入ろうとしているマックスは、感情や欲求に従った衝動的な態度を抑制し、言葉を使って理性的な態度で自己の思いを主張することが求められている。それは、先にも記したように、衝動的に大暴れするマックスの姿を母親が“怪獣”、すなわち

理性を持たず欲望のままに行動する象徴的存在に例えて叱っていることからもうかがえる。

おそらく、主な読者である幼児期の子供も、この怪獣達の示す姿に、衝動のまま行動しようとするマックスの（そして自分の）心の内に住む幼い頃の未熟な自我の姿を投影して読み取っているのではないだろうか。

その幼さの象徴である怪獣達に対し、マックスは腹を立てて「しずかにしろ！（静かにしろ！）」と怒鳴りつける。それはまさに、いたづらをして大暴れするマックスに対してつい先ほど母親が行ったばかりの叱責であり、衝動をうまく統制しようとしないうちの子供をしつける際、世の中の親達が頻繁にとる行動である。

この異界とそこに存在する怪獣達はすべてマックスの心が作りだした空想世界の住人であり、マックスの心の内面を象徴している。つまり、マックスは親からのしつけによって示された価値観を自ら取り込み内面化することで、心の中に存在し続けている衝動に支配された幼い自己（怪獣達）を、より成長した理性的な自我（異界を訪れたマックス）の力で統制しようとしているのだ。

現実のしつけ場面では、親達はまず強く叱って望ましくない行動をやめさせ、その後、どう行動するのが正しいのかを子供に教え諭すという行動をとることが多い。マックスもそれと同じように怒鳴りつけることで怪獣達をいったん静かにさせた後、「かいじゅうならしのまほう（怪獣慣らしの魔法）」を使う。彼が怪獣達の目をじっとにらむと、怪獣達は恐れ入ってマックスを「かいじゅうたちのおうさま（怪獣達の王様）」として認め、素直に言うことを聞くようになる。まさに親が子供をしつけるのと同じ方法で、成長し自律したマックスの自我は、心に残っていた幼い衝動を見事に統制してみせたのである。

王様となったマックスは、怪獣達に「かいじゅうおどりを はじめよう！（怪獣踊りを始めよう！）」を大声を上げる。「怪獣踊りをしろ！」と上の立場の者が下の者に（例えば、親が子に）対立的に命じるという形ではなく、「怪獣踊りを始めよう！」と対等な者同士が誘いあう形でマックス自身も含めた怪獣踊りが始まるのだ。この様子からは、衝動を統制することが親からの一方的な指示にただ従っているだけではなく、自らの意志によって行われているということがうかがわれ、「衝動は自らの意志で統制すべきだ」という親からのしつけによってもたらされた価値観がうまく内面化されている様子が見てとれる。

## 5. 怪獣達と過ごす遊びの時間

《場面 12；23-24 ページ》《場面 13；25-26 ページ》《場面 14；27-28 ページ》

この3つの場面には言葉がまったく添えられておらず、怪獣達と一緒に怪獣踊りに熱中するマックスの姿がていねいに描き込まれた絵だけで表現されている。いずれの場面でも、彼は目をつむって楽しそうに微笑みを浮かべたり、あるいは得意そうな表情で怪獣達との踊りに没頭している。ここで注目したいのは、いずれの場面もマックスは決してただ単に衝動的に暴れているのではなく、自分自身を、そしてその分身たる怪獣達をきちんと統制して理性的に踊っているという点である。

《場面 12》では、マックスと怪獣達は満月を崇めるかのように月に向かって歌い踊っているが、それは決して熱狂的なものではなく、怪獣の王様たるマックスによって怪獣達はきちんと統率されている。《場面 13》では、マックスと怪獣達があたかも雲梯で遊んでいるかのように木の枝を次々と渡っているが、これも自己の身体をしっかりコントロールしないとできない遊びである。さらに《場面 14》では、統制の取れた怪獣達によって担ぎあげられ、王様らしく

整然とパレードを行っている。そこには、《場面1》や《場面2》に見られるような「いたずらをはじめて おおあばれ（大暴れ）」している無軌道で衝動的な様子とは明らかに異なったマックスの姿が描かれている。

感情や欲求に支配されて衝動的にふるまう幼いマックスはもうここにはいない。ここにいるのは感情や欲求を理性によって完全に統制しているマックスである。幼児前期の自律性獲得の危機をみごとに乗り切り、幼児後期の主体性獲得に向けてのびのびと行動しているのだ。《場面14》に描かれた得意満面のマックスの表情は、Erikson (1963/2003) の言う“自律性の獲得対恥・疑惑”の葛藤を見事に乗り越え、自己の態度を自分自身で選択し決定できる“意志”の感覚を手に入れたという自負が表れているのかもしれない。

## 6. 遊びの終わり現実世界への帰還

### 《場面 15 ; 29-30 ページ》《場面 16 ; 31-32 ページ》

ただ、この新しい発達段階への適応にはまだまだ時間がかかりそうだ。自分自身を常に理性的に統制し続けるのは今のマックスにとっては荷が重いのか、怪獣踊りに飽きて疲れてきた彼は「もうたくさんだ。やめえ！」と叫んで怪獣踊りをやめさせる。そして、大暴れした自分に対して母親がくださった罰とまったく同じように、「ゆうごはんぬき（夕ご飯抜き）」で怪獣達を眠らせてしまう。

とは言え、遊びの時間を終わらせる決断をしたのもマックスなら、それを怪獣達に命じて実行させたのも他ならぬマックス自身である。つまり、このときのマックスの行動は決して親によって他律的に規定されているのではなく、ちゃんと自分の意志で自律的に統制されたものであり、自律性を獲得した発達した姿として描かれているのだ。

けれど、やがてマックスは寂しくなって母親（本文中には「やさしいだれかさん（優しい誰かさん）」と記されている）のところに帰りたくなってしまう。異界ではなく、マックスがもともと所属していた「とおいとおいせかいのむこう（遠い遠い世界の向こう）」から「おいしいにおい（おいしい匂い）」が流れてきて、これを契機にマックスは怪獣の王様を辞めることを決意する。すなわち、母親の用意してくれた食事の匂いによって現実世界を思い出したマックスは、空想をやめ、現実へ帰る道を選ぶことに決めるのである。

3歳前後のこの時期は、養育者への愛着形成の最終段階である目標修正的パートナーシップ形成の段階(Bowlby, 1969/2003)とも重なってくる。それまで愛着対象者に対して物理的、身体的に接近することを強く求めていた子供も、内的作業モデルという形で愛着対象者を心的イメージとして内在化できるようになり、心内のこのイメージを安全基地の代替として利用することで、現実の愛着対象者から物理的に離れた状況でも安定して過ごせるようになってくる。

もちろんこの段階に入ったからといっていきなり長時間の愛着対象者からの分離が可能となるわけではなく、対象者から離れてしばらく一人で過ごしたり、再び接近・接触を求めたり、をくり返しつつ、離れていても安定していられる時間が徐々に長くなっていく。

マックスも寝室に閉じ込められてからしばらくの間は、愛着対象者である母親から離れ、自らの想像世界で楽しく遊んで過ごしていた。しかし、それがしばらく続くと母親が恋しくなり、母親の元に戻りたくなってくる。そんなマックスの心的表象としての母親イメージを構成している要素の1つが、いつも母親が用意してくれる食事であり、その「おいしい匂い」なのである。

Mahler (1975/2000) も、3歳頃には情緒的対象恒常性の成立を背景として個性性を確立す

ることに伴い、安定した心的イメージを母親（愛情対象）の代用として利用することが可能となり、愛情対象の不在に耐えられるようになることを指摘している。彼女は、この分離－個体化の過程が諸機能の自律を背景とした“母親からの分離”と愛情対象喪失への不安から生じる“母親への再接近”とをくり返しつつ進んでいくと考えている。

母親に反発して想像世界で遊ぶマックスは、しばらくは「怪獣達の王様」として高揚した気分母親からの分離を楽しんでいた。だが、やがて分離不安が強くなり、「おうさまなのにさびしくなって、やさしいだれかさんのところへ かえりたく（王様なのに寂しくなって、優しい誰かさん（母親）のところへ帰りたく）」なってくる。その姿には、Mahler (1975/2000) の指摘する分離と再接近をくり返しつつ個性の確立を目指す幼児の姿が如実に映し出されていると言えよう。

母親への再接近を求めて異界から現実世界へ戻ろうとするマックスを、怪獣達は「たべちゃいたいほど おまえがすきなんだ。たべてやるから いかないで（食べちゃいたいほどお前が好きなんだ。食べてやるから行かないで）」と懇願し、帰還を止めようとする。「食べちゃいたいほどおまえが好きなんだ」という言葉からは、この怪獣達にとって“食べる”という根源的な欲求がとても強い肯定的な感情を伴っていることがうかがえる。生得的に持つ食べることに對する欲求がこれほど重視されているのは、やはりこの怪獣達が幼く原初的な乳児期の心性を象徴しているからなのかもしれない。

さらに、「食べてやるから行かないで」という言葉からは、マックスを“食べてやる”という行為に彼を異世界に留ませるだけの魅力や価値があると、怪獣達が考えていることが伝わってくる。怪獣達に食べられるということは、マックスが肉体的にも精神的にも怪獣達に吸収されてしまうことを意味している。つまり、怪獣達に食べられることによってこの異界に留まれば、彼がここへ来ることを促す動機ともなった“欲求のおもむくままに衝動的にわがままに荒々しく行動できる野生の世界（The wild things として活動できる世界）”，すなわち自己を自我によって統制しなくてもよかった乳児期というより幼い発達段階に完全に退行することができる、とマックスを誘っているのである。

それは、目標修正的なパートナーシップを形成して無理に母親から離れる必要も、情緒の対象恒常性を頼りに母親からの分離不安に耐えつつ個体化をめざす必要もない世界。しつけの始まる前の、母親と溶けあうような一体感を感じていた、あの心から安心できる世界である。

けれど、マックスは「そんなの いやだ!」と断固拒否する。怪獣達からの幼く野性的な抗議（すごい声で「うおーっ」と吠えて、すごい歯をがちがち鳴らして、すごい目玉をぎよるぎよるさせて、すごい爪をむき出す）にもまったく惑わされることなく、彼はさっさと帰りの船に乗り込んで「さよなら」と手を振るのだ。

## 7. 異界から現実世界へ

《場面 17 ; 33-34 ページ》《場面 18 ; 35-36 ページ》《場面 19 ; 37 ページ》

異界から現実世界への渡りも、最初と同様、「1 週間過ぎ、2 週間過ぎ、ひと月ふた月日がたつて、1 年と 1 日航海すると」というリズムカルで形式化された“合い言葉”によって示される。この言葉は、マックスにとって、ごっこ遊びの時間が終わって現実へ帰還することを意味していると同時に、読者である子供達に対しては非現実的な空想の物語（マックスの冒険物語）が終了することを伝える大切な役割を担っている。

その航海が終わると、「いつのまにやら」マックスは自分の寝室に立っている。鬱蒼と茂るジャ



ングルの木々はもうそこにはなく、居心地の良さそうな柔らかいベッドのあるいつもの部屋だ。その落ち着いた部屋の窓からは、異界での冒険の名残であるかのような満月がのぞいていた。

部屋には、母親との親密な関係性の象徴である夕ご飯が用意されており、最後のページである《場面19》には「(夕ご飯が) まだほかほかとあたたかかった(まだ、ほかほかと温かかった)」という言葉だけが絵を伴わずに記されている。

想像上の異界で、荒々しく幼い衝動を自分の意志でうまく統制し、より成長した自己を実感することで満足した彼には、少なくともしばらくの間は、いたずらをして大暴れる必要も、「おまえを食べちゃうぞ!」と母親を威嚇する必要もなくなった。

この現実世界で、次に分離を目指すまでの束の間、大好きな母親に思う存分甘えて再接近を果たすであろう彼の姿が冒険の余韻とともに思い浮かぶラストシーンである。

### まとめ

本論では、初版以来50年以上読み継がれてきた絵本『かいじゅうたちのいるところ (Where the wild things are)』を取りあげ、主な読み手である幼児期の子供達にとってこの絵本がどのような役割を果たしているのかを考察した。

自律性獲得の危機を乗り越え、新たに自発性獲得に向けて発達を続ける子供達にとって、主人公のマックスの活躍は大きな示唆を与えているであろうことが推察できる。ややもすると自律性を放棄して乳児の頃の愛着対象者への依存状態へ退行したいという誘惑に耐えながら、自己を意志の力で統制して、新たな世界、自分と同世代の仲間達が待つ世界へと乗り出そうとする子供達。

人と人との思いが複雑に交錯する初めて出会う人間関係の中で、自発性を獲得して自分らしく生きていく道を探る彼らは、幼児期の子供なりにさまざまな苦悩や挫折、戸惑いを経験していることであろう。

そんな子供達がこの物語に出会うことで、同じ悩みに葛藤しているマックスに“同一視”し、母親に反抗して怪獣達の王様となった彼が幼さの象徴たる怪獣達を従えて楽しそうに遊ぶ姿に“カタルシス”を覚え、怪獣達の世界と母親との間を行きつ戻りつしながら自分らしさを探すマックスの姿に、自己の課題に立ち向かうための“洞察”を得ることができるのではないだろうか。

それは、あえて読書療法という形式を取らずとも、身近な大人達から読み聞かせてもらう絵本の世界にどっぷりと浸かることで得られる導きあるいは支えなのかもしれない。

我が国だけでも125万部を世に出したこの絵本が長きにわたって支持され続けているのは、幼児達の発達を間接的に支えてくれているからなのかもしれない。

### 引用文献

- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss. Vol.1 Attachment. / 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一（訳）  
2003 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版。  
Erikson, E. H. 1963 Childhood and society. / 仁科弥生（訳）2003 幼児期と社会 みすず書房。  
井原成男 1985 子どもの発達と絵本——ぬいぐるみから絵本の世界へ 長野大学紀要 6(4), 23-37.  
Mahler, M. S., Pine, F. & Bergman, A. 1975 The psychological birth of the human infant. / 高橋雅士・織田正美・浜畑紀（訳）2000 乳幼児の心理的誕生 黎明書房。

山 口 雅 史

三沢英夫 1987 子どもの心理発達と絵本 白梅学園短期大学紀要 (23), 85-105.

西川晶子 2016 絵本における「冒険」に関する考察 信州豊南短期大学紀要 (33), 1-22.

Pardeck, Jean A. & Pardeck, John T. 1984 Young people with problems : A guide to Bibliotherapy.  
Greenwood press.

Sendak, M. 1963 Where the wild things are. / 神宮輝夫(訳) 2005 かいじゅうたちのいるところ 富山書房.  
ミリオンぶっく 2019年版 2019 株式会社トーハン.